

第3章

おひとり様の 死後事務

2

だれに託すのか

“家族がわり”を探してみる 「血縁」を超えた「結縁」の世界

おひとり様といえども、終活の世界では、だれかと接点を持つことが必要だ。

おひとり様が最期を迎えたとき…。山のようにある死後の事務を、どうしたらいいのだろう。

はつきりと言えることは、周囲の何かしらとの関係性をつくらないと、死後事務ははかどらないということだ。

それが人であるか、企業や団体であるかは、どうでもいい。最期の最期まで、おひとり様人生を貫くのであれば、生前からどこかとの関係を築く必要がある。

“疑似家族”のような関係性でもいおうか。「周囲と完全に縁を切ったおひとり様」というのはあり得ないのだと、しっかりと肝に

銘じておこう。

さて、具体的に、だれに託したらいいのだろう。

考えられる方法は、いくつかある。

- ① 生前に付き合いがなかったとしても親族に頼む
 - ② 親しかった友人や知人に頼む
 - ③ 信託銀行など金融機関のサービスを利用する
 - ④ 弁護士、税理士など士業に頼む
 - ⑤ 自分の住む自治体などに窓口があれば頼む
- それぞれメリット、デメリットがあるので、自分に合った疑似家

族を探す必要がある。

7割がおひとり様

具体的な例として、1993年に立ち上がり、すでに30年近い歴史を持つ「NPOりすシステム」の活動を見てみよう。りすシステムは、利用者と「契約」を結ぶことで、晩年の生活サポートや死後事務を請け負う。「りす」とは「Living・Support・Service」の頭文字をとってつけられた。

本部を含め全国に11拠点を構え、契約者は、すでに亡くなった人を含め約6600人。現在存命の人は4000人を超える。

平均年齢は76・8歳で、おひとり様は7割にも達する。家族や親戚がいるものの、「迷惑をかけたくない」と契約するケースも多いという。

代表理事の杉山歩さんは「葬儀社やお墓の生前予約をしたり、遺言書を書いておいたり、みなさん自分なりに準備はしているんです。でもそれらは『点』であって、一つひとつがバラバラ。死後事務というのは『線』でつながっているものですから、本人が準備したことをきちんと実行する人や機関が必要です。りすシステムは、『契約家族』となって死後事務をしていま

メリット デメリット 「死後事務」を、だれに託すのか

	メリット	デメリット
【遠縁でも親族】	法律が親族による相続や精算を前提にしているので、物事が比較的スムーズに進む。	付き合いのなかった人に依頼することへの躊躇も。
【知人、友人】	知った仲であれば、気安く依頼できる。	金銭が絡んだ精算・清算事務など、法律面でのハードルが高く、思った通りにいかない可能性もある。
【NPOなど専門団体】	システムとノウハウが整備されており安心できる。	会費や事前納付する実務代などが必要。安くて100万円程度はかかる。
【金融機関など企業】	事故の起こりえないシステムが整備されている。	総じて富裕層向けであるうえに、細かなリクエストは受け入れてもらにくい。
【弁護士など士業】	相続を中心に法律分野に強く、トラブルも起きにくい。	事務所によって、受けてくれる範疇や費用にばらつきがある。
【行政など公共団体】	安心して委ねられる仕組みが整備されている。	窓口があるところは一部の自治体に限られている。金銭が絡む分野は受け付けないことが一般的。

す」と語る。

合葬墓の先駆け

具体的には、結ばれた契約に基づいて、入居保証や入院保証、付き添いといった「生前事務」や、火葬・納骨、部屋の片づけなどの「死後事務」をおこなう。

契約者が認知症になって判断力が落ちてしまったときには、任意後見人としてサポートをする。サポートのための費用は、事前に預託金(70万円)を預かり、そこから捻出する仕組みになっている。

承継者がいなくても入れる墓の先駆けとして、1989年にできた合葬墓「もやい」の運営団体がルートとなっているため、墓の心配もいらない。

「墓友」という言葉のルーツ

「墓」をきっかけに生まれる新たなつながりもある。「墓友」という言葉の生みの親である「NPO法人エンディングセンター」は、桜の木を墓標とした跡継ぎを必要としない墓「桜葬」を東京と大阪で企画し、会員運営している。

個別区画が隣接するいわばマンションのような集合墓で、年に一度、桜の咲く季節に合同祭祀(桜葬メモリアル)を開いて追悼する。

将来的にそこに眠る人も、眠る人を偲んで訪れる人も「血縁」を超えた「結縁」でつながるというのが理念だ。

理事長の井上治代さんは「まったく別の人生をそれぞれに歩んできた人たちが、晩年に同じ『桜葬墓地』を契約したことによって出会い、墓を核として信頼関係を築き、『おたがいさま』と晩年を助け合えるゆるやかな仲間意識が育まれている」と話す。

エンディングセンターには「もう一つの我が家」と呼ばれる一軒家がある。そこでは団体が主宰する集まりのほか、会員同士で自主運営する書道や読書、合唱などさまざまなサークル活動がおこなわれ、会員同士それぞれが得意分野を生かしながら楽しんでいる。参加者はおひとり様が多い。

そこでは、会員同士が「おたがいさま」の精神で助け合ったり、センターも入院保証や任意後見など

おひとり様の先輩に 聞いてみた



「自分のことは最後まで自分で選択したい」と話す渡邊タカ子さん

「契約家族」から手に入れた「安心」 甥や姪に迷惑をかけたくなかった

渡邊タカ子さん 89歳（NPOりすシステム契約者）

——生前契約をしようと思ったきっかけは？

ひとり身だったので、いずれは老人ホームに入ろうと思っていたまじした。

しかし、いざ入居の契約をしようと思ったら、保証人が2人も必要だということです。妹やいとこの顔が頭に浮かびました。けど、万が一のときに駆けつけてもらわなくてはいいけませんから、迷惑をかけてしまうと諦めたんです。

そんなとき保証人がいなくても契約できるりすシステムさんのことを雑誌の広告で知り、すぐさま名

古屋の支部へ赴いて契約をしました。2002年、70歳のときでした。

親戚より、遠慮のない関係

——親戚がいても、あえて契約を決めた理由はなんですか？

「妹や甥っ子、姪っ子だっているんだから心配しなくて大丈夫よ」と言ってくれる友達もいました。

でも、たとえ身内であっても人の最期を看取るのは大変なこと。自分のことは何とか最後まで自分でまっとうしたいと思っていました。

身内の場合、助けてもらいたいと思っても「いまは都合が悪いから」なんていろいろな気を遣ってしまうでしょう。いつでも遠慮なくお願いできてそれに応えてくださる関係が私には合っていると思いました。

住まいの保証人、カギも預け

——79歳で単身、東京に引っ越されてきたと聞きました。

ふと、「東京ってどんなところなんだろう」と興味がわいたんです。それまでずっと仕事ひと筋で東京なんて行ったこともなかったから、人生に一度くらいね（笑）。

とはいえ、なんのツテも知り合いいもなく、りすシステムのスタッフに出迎えていただいて、引っ越しにともなう銀行や役所の手続きなどすべて付き添っていただきました。

住まいの保証人にもなっていたできましたし、自宅のカギもひとつ預けているんです。「具合が悪かったり何か心配事があったりすれば、遠慮なく頼ればいい」という安心感は、私にとって何にも変えがたいものです。

両親の墓を「墓じまい」

——今後はどう生活される予定ですか？

実は3年ほど前に両親の墓じま

いを済ませました。大分県にある竹田市のお寺にあるお墓だったので、東京にできてからは、あまりお参りにも行けずに気になっていたので安心しました。古い墓は更地にして、両親の遺骨はりすシステムの紹介で功德院（大分県由布市）の納骨堂に永代供養をお願いしています。自分のお墓も、両親と同じ場所に決めてあるし、あとはいよいよ自分の最後をどこで迎えるかだけです。東京生活も10年たちました。生まれ故郷である大分に戻ろうかなとも考えています。24時間、管理していただけるような施設を探してもらってね。

兄妹など頼りになる家族があったとしても自分より先に亡くなってしまう可能性がないとは言えません。私はおかげさまでこの歳まで日々を楽しく過ごしていますが、これも「安心」があるから。「自分のことは最後まで自分で選択したい」という気持ちをかなえてくれる仕組みは、ひとりの私にとって、心強く、とてもありがたいものです。

「NPOりすシステム」 1993年に立ち上がり、すでに30年近い歴史を持つ。りすシステムは、利用者と「契約」を結ぶことで、晩年の生活サポートや死後事務を請け負う。「りす」とは「Living・Support・Service」の頭文字をとってつけられた。